

新しい相棒

「……フウ」

鏡使いが溜め息を漏らす。

どう操作しても、物見の鏡には砂嵐のような像しか映らなくなっていた。そうだったのは昨日から……否、思い返してみれば以前から鏡に映した物がたまに歪むことがあった。それは何時からだだったろうか……、

「ゴモロス神殿の白い霧……か？」

鏡使いが考えを巡らしていると……、

ギギギッ……ギギーッ、ボタン！

ラモー・ルーの居室の扉が今にも壊れそうな音と共に大きく開かれた。と同時に、

ゴトツ、ゴトツ、ゴトトツ、

重い物が引き摺られる音。

物見の鏡の操作とサラ以外には無関心でいる鏡使いも、流石に何事かと扉の方を振り向くと、……キャロンと従者二人が何かを運び込んでいる。

「……フウ」

やれやれ、あの娘が更に面倒ごとを持ち込んできたぞと、鏡使いは二つ目の溜め息を吐いた。

ゴロゴロと鏡使いの傍まで運び込まれてきたのは、台車に乗せられた揺り木馬。

「うふっ、どうこれ？」

キャロンが嬉しそうに見せる木馬は翼竜キョウリョウが翼を閉じて立ち、その口にはニンジンくわを啜くわえた姿を模して造られていた。

「この間ね、思いついたの。あたし乗るなら天馬ベガサスより翼竜キョウリョウの方がいいなって」

翼竜キョウリョウ形の木馬を撫でるキャロン。木馬の表面はゴツゴツとした鱗が造形されていた。背中の方を見ると、乗った者の敏感な部分を舐る為だろう、小指ほどの突起がブラシのよキョウリョウうに無数に生えていた。そして、尻を置く場所にはキャロンお気に入りの翼竜キョウリョウのデイルドキョウリョウがそり立っていた。

「ほら、この顔見て。キョウラそっくり！」

キャロンがそう言いながら、ポンポンと叩いているキョウラの頭部は失敗作かと思えるほどに何とも不細工な出来だったが、彼女は頗すこぶる気に入っているようだった。

「このキョウラもニンジンが大好物なの」

キャロンが翼竜キョウリウが啞くわえていているニンジンを持って前後に振ると、木馬が揺れ始めた。ニンジンが木馬のハンドル代わりらしい。

「フツ……」

嘲笑にも似た三つ目の溜め息が鏡使いの鼻から漏れ出る。

人間だった頃の鏡使いであれば、淫具を携えた素裸の少女が目の前に立っていれば、忽ち襲いかかっていただろう。しかし、木馬を嬉嬉として見せびらかすキャロンは子供にか見え、それが鏡使いが彼女に興味を持たない理由だった。

「ねえ、ラモー様を映してよ」

「無理だ」

「あっ、また意地悪言って。じゃあ、またあたしが使っちゃおうかな？」

キャロンは両手を広げ、指をワキワキと動かし、襲いかかるようなポーズをする。

「……鏡の調子が悪いのだ」

鏡使いが鏡を操作してみせるが、鏡には何も映らなかった。

「ゴモロス神殿の白い霧の影響かもしれない」

「ふうん、そうなんだ……」

「分かったなら、それを持って出て行け」

「折角ラモー様のお顔を見ながらしようと思ったのに……」

「自分の部屋に帰って使うんだな」

「……ダメよ」

左脚を大きく上げ翼竜キョウリョウの背にかけるキャロン。

「あたし、すっかりエッチな感じになっちゃってるんだから」

少しはにかみながら右手で尻たぶを拡げてみせる。

「ほら……」

丸見えになった彼処は愛液で潤み、尻穴にはアナルプラグが挿入されていた。

「……」

鏡使いは無言で鏡に向かうと、手を忙しく動かし始めた。

「むう……」

淫猥な姿をアピールしても、いつもと変わらない鏡使いの態度にむくれるキャロン。しかし、すぐに気を取り直して翼竜キョウリョウの背に体を載せると、尻を突き出すように腰を振り、クレバスでデイルドを愛撫し始める。

「あんっ……あふん……」

亀頭で花卉を割ると堰を切ったように愛液が溢れ出し、デイルドを濡らしていく。

ローション代わりに愛液をデイルドに塗り終えると、キャロンは鏡あぶみの上に立ち、亀頭を膣口に宛がう。

「あふっ……キーラ、今日はちゃんと言う事聞いてね」

ぬらぬらとテカるデイルドがキャロンの胎内なかへと呑み込まれていく。

「はううっ、……お腹が一杯になってくう……はああん……」

尻穴に加え、膣が異物で満たされていく快感にキャロンはうっとりとした表情を浮かべていた。

又ッ、又ッ、又……

亀頭がポルチオを押し始めるとキャロンは脚をそろり／＼と鏡あぶみから台の上へと降ろす。デイルドの上に徐々に自分の体重が乗っていくのを感じる……。

「ああん……キーラ、大人しくしてるのよ……」

爪先立ちで翼竜に跨がったキャロンの体がゆらり／＼と揺れる。

天馬ベガサスとは違い、翼竜キーラが載った台は前後左右、円を描くように揺れるように造られている。油断をしてバランスを崩すと容赦なくデイルドがキャロンの子宮に襲いかかる。

「ひいっ!! だめえキーラ……あああっ! ダメえ!」

デイルドがキャロンの肉襞を掻き混ぜる動きはアナルプラグに伝わり、尻穴も同時に甚

振られる。——アナルプラグは鈴のような構造となっていて、仕込まれた玉が動き回り、バイブレーションを生む仕組みになっていた——

「ダメえ！ お尻にも入ってるんだから、暴れちゃダメえ！」

二つの穴を同時に責められ、バランスを取ることが^{まま}俚ならなくなったキャロンは堪らず^{あぶみ}鏡に脚を掛けた。

「はあ、はあ……、こんなのあたし壊れちゃう……」

息を整えながら、エンジンを掴み、手と足でデイルドが具合のいい位置になるよう姿勢を調整するキャロン。

「はああん、これなら……あっんっ！」

キャロンはリズムカルに腰を振り、ピストン運動を始める。

「はうらう、……キーラ、そこいい、……すごくいいよお」

又チャッ、又チャッ、

キャロンと翼竜が繋がった部分が淫猥な音を奏で始める。

「……じゃあ加速装置いくよお」

キャロンが翼竜を揺すり始めると、前後左右の揺れが思わぬ動きになってデイルドが彼

女の子宮に襲いかかる。

「はああっ！ あああっ！ あああっ！」

グッ、グッ、と子宮を叩かれる快感の波動がキャロンの体を包んでいく。

「キーラ、もつとあたしの子宮突いて……もつと！ ……もつとお！」

さらに強い快感を求め、キャロンの脚は自然と鏡あぶみから離れていった。体重と翼竜が揺れる勢いとは相まって、突き破られそうな衝撃が彼女の子宮を襲う。

「ひっ、あああっ！ 壊れちゃうう！ はあああああっ！」

それはラモー・ルーに突かれる衝撃にも似て、キャロンの体の芯を快感が突き抜けていった。

「ああんっ！ ああんっ！ ああんっ！ ああんっ！」

鏡使いは物見の鏡の調整を黙々と続けていたが、キャロンが性戯に耽る声に集中力は乱されるばかり。

サラと歳は違わないのにどうしてこうも子供なのか、騒々しい……。

「主達ぬしらもご苦労なことだ。同じ仕えるとしてもサラ様の方が良かったであろう」
作業の手を止め、思わず悪態をつく鏡使い。

「ヒヒッ……むしろキャロン様の方が、お仕えのし甲斐がある」

「……」

てっきり同意が得られるだろうと思っていた鏡使いは意外な返答に少しムツとする。

「じゃじゃ馬娘ではあるが、キャロン様は性欲には素直で純粋だ。我らの提供する性戯をことごとく楽しんで下さる」

「見てみよ、キャロン様を。淫欲に打ち震える表情、オルガスムスに体を震わせている様を。それでいて少女の純真さを失わない。ラモー様もそこがお気に入りなのだ」

(ふん、我には理解できないな)

鏡使いは再び手を動かし始める。

性戯を一頻りひとしほ楽しみ、疲れた体を翼竜キーラの背の上に横たえたキャロン。両脚は大きく開き、だらんと垂らしていた。彼女は絶頂の余韻と開放感が楽しめるこの体勢が好きだった。こうやって情事の後の姿を晒すと皆が美しいと褒めてくれ、自尊心がくすぐ擦られるのも心地よかった。

「ねえ、お尻の抜いて……」

キャロンが催促するように尻を浮かすと、従者は彼女のAnalプラグをゆっくりと引き

抜いた。

「はあああん……」

尻穴が拡張られる快感が、キャロンに艶やかな声を上げさせた。

「キャロン様、翼竜の具合はいかがでしたか？」

「もう、こんなに暴れん坊だなんて。……ここ壊れるかと思っちゃった」

何ともなっていない？ ぷっくりとした形の良い陰唇を左右に拡張して従者に見せるキャロン。先まで、ディルドを奥深く呑み込んでいた事が嘘のように、小さく口をすぼめた桜色の膣口が息衝いていた。

「合わないようでしたら、大人しくなるよう調整しましょう」

従者の生真面目な答えに、キャロンは慌てて翼竜に抱きついた。

「いやん！ ダメよ。このままでいいから」

取り上げられそうになったおもちやを渡すまいとする子供のようになり、彼女はぎゅっと翼竜にしがみつく。

「……あっ、ちょっと待って」

何かを思い出したのか、腰をくねらせ、花弁を翼竜の背中の中のブラシに擦りつけ始めた。愛液に濡れたヴァギナがにちゃにちゃと音を立てる。

「あふん……、ここがもうちょっと、チクチクしてる方がいいかも」
従者は艶めかしい動きをしているキャロンの彼処に顔を近付け、彼女の体の反応をじつと観察する。

「……ふむ、もっとクリトリスに刺激が欲しいと」

「それと、おしっここの穴も虐められたいの。……あんもう、何言わせるのよエッチィ！」
ぱっと両手で顔を覆うキャロン。

「……でも、そういう事、あはっ」

彼女は体を起こすと、照れ隠しに翼竜キークラを前後に揺らし始めた。

「畏まりました」

キャロンと従者達のやりとりを横目でチラリと見る鏡使い。

(ふん、まるで子供とその世話係だな……)

やれやれと小さく首を振る……。

「新しい相棒」おわり